
巻頭言



人間看護学部 学部長

いと しま よう こ
糸 島 陽 子

新型コロナウイルス感染症の世界的流行をうけ、1年延期となった東京オリンピック・パラリンピックが開催された。開催の賛否はあったものの「東京2020」を合言葉に57年ぶりの日本での開催である。国を超え、ひとつの競技に真摯に向き合う選手の姿をみると、熱いものを感じるのは私だけではなかったと思う。

開催期間は17日だったが、そこにたどり着くまでの選手の「たゆまない努力」と競技に「真摯に向き合う姿勢」は、看護の研究に通ずるものがある。研究は一夜にしてならずで、地道な取り組みがなければ途中で頓挫してしまい、自分が何を目的に始めたのかまで時には見失ってしまう。何度となく過去の研究を調べ俯瞰し、今何が課題となっているのかトレンドを追求し、研究成果をどのように未来につなげていくのかという視点を持ちながら研究に取り組んでいく必要がある。

1つの研究成果は、研究者自身だけで導いているわけではなく、多くの人との関わりの中から生まれている。昨今のコロナ禍では、調査の難しさに直面した人も少なくないはずである。そのような中で、最後まで取り組み続け言語化する努力を続けたからこそ、今回の公表につながっている。看護は実践の科学と言われるように、裏付けのある看護を提供するためにも、ここにある研究成果を多くの人に活用していただければと思う。

そして、2021年の流行語「リアル二刀流」のように、看護の実践者であり、教育者であり、研究者である三刀流で現在社会における課題を看護の視点から探求するとともに、海外での研究活動も期待したい。